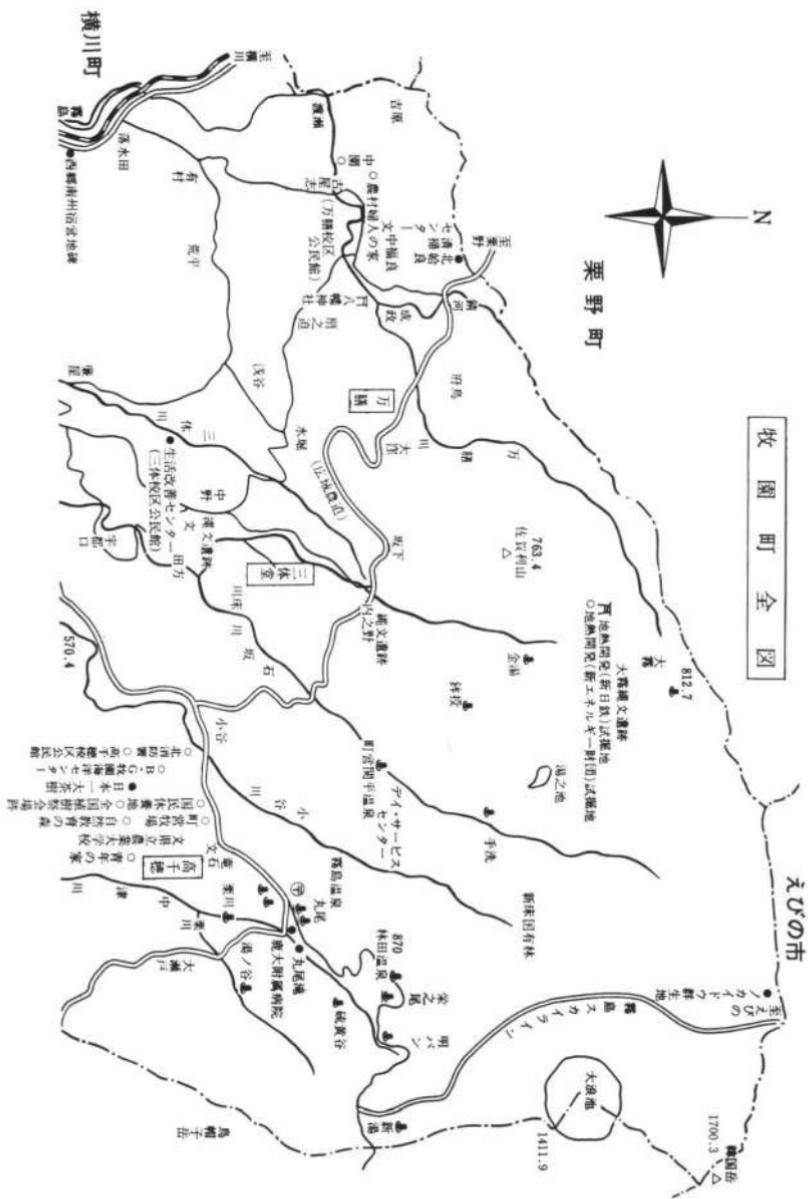
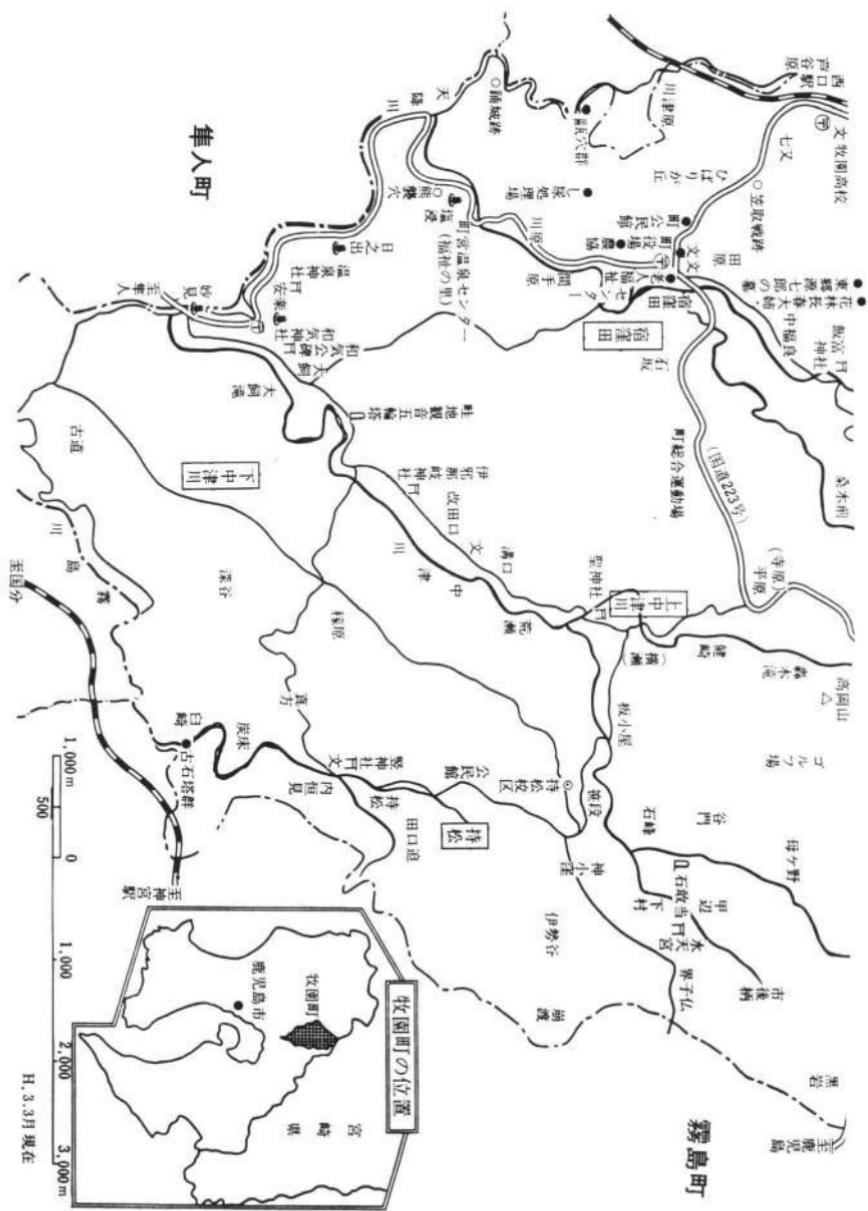


第一編 自然·地誌

牧園町全図





第一章 位置・面積

一位置

本町は鹿児島県のほぼ東北部を占め、姶良郡の北部に位置する。鹿児島市から東北に約四九・一キロメートル離れ、九州山脈の南端に隆起する霧島火山群の山ろく一帯の地を占め、北は宮崎県えびの市並びに栗野町に接し、東は霧島町、南は隼人町、西は天降川を挟み横川町に接している。

この東西に狭く、南北に長い地域をもつわが町の最北端は、大字万膳大霧の牧園町・栗野町・宮崎県えびの市の三境界点で、北緯三一度五分二五秒、最南端は大字下中津川古道で北緯三一度四七分三九秒、また、東端は大字高千穂韓国岳の頂上東経一三〇度五一分五一秒八、西端は大字万膳吉原、東経一三〇度四三分五〇秒六である。東西一〇・五平方キロメートル、南北一七・五平方キロメートルの菱形をなしている。

二面積

本町は総面積一二・九六五ヘクタールで、その広さは郡内一位、県下町村（市を除く）第九位で、吉松町の約二・四倍、溝辺町の一倍、横川町の一・八倍の広さをも



霧島山

第1章 位置・面積

面 積

(平成元年12月1日現在)

総面積	12,965 ^{ha}	100.0%	摘要	要
① 山林、原野	9,616	74.0	国、県、町、民有、原野	
② 農用地	1,468	11.3	水田、畑、草地、樹園地	
③ その他	1,881	14.7	宅地、道路、河川、その他	

土地の利用形態

① 山林、原野

(平成元年12月1日現在)

私有地	5,651 ^{ha}	58.7%
町有地	1,493	15.5
県有地	181	1.9
国有地	2,291	23.9
小計	9,616	100.0

② 農用地

水田	463 ^{ha}	315%
畑	940	64.0
牧場	65	4.5
小計	1,468	100.0

③ その他

宅地	246 ^{ha}	21.6%	
鉱泉地	0.3		
雜種地	82	7.2	J R、ゴルフ場、その他
道路、河川、公共用地	811	71.2	
小計	1,139.3	100.0	

(資料 町税務課)

つ大きな町である。しかし、総面積の七九・九〇パーセントを山林原野で占め、農耕地はわずかに一一・三〇パーセント、その他が八・八パーセントとなっている。面積の内訳は表に示したとおりである。

農地は、水稻の減反政策により水田の荒廃が甚だしく、畑地においても地形的な不利と労働力の劣悪などによる耕作放棄、転用が目立ち、減少の一途をたどっている。農地の転用状況をみると、山林への転用が多く、また、最近宅地などへの転用もある。これは、田畠の耕地面積が減少し、反面、山林・原野・牧場などの面積が増加したものと思われる。

第二章 地勢・地質

一 地勢・地質

牧園町の地勢を概観すると、北東部は韓國岳、大浪池、新燃岳、中岳、高千穂峯などの霧島火山群が高く連なってそびえている。その南西斜面のすそ野は遠く延びて、更に南方に広く開け、標高二〇〇メートルから六〇〇メートルの火山噴出物原野を構成している。ここに位置する牧園町は、北東部が高く南西部に向かって低いこの波状高地によつて占められ、谷間は一般に深く切り立つており、地形は急峻で複雑な様相を呈し、平坦地は極めて少ない。

これらの地形を、霧島連山の生い立ちと、姶良・加久藤カルデラ説によつて考察すると、本県の陸地は、いまから約二億二〇〇〇万年から七〇〇〇万年前の中生代に、アルプス造山運動によつてつくられたものである。基盤は四十層群といわれるものである。新生代の第三

期の初めごろ（今から約七〇〇〇万年前）になると、日本の付近は激しい造山運動で次第に隆起し、大陸と陸続きになった（大陸と陸続きであった日本は、およそ一万八〇〇〇年前に現在とほとんど変わらない列島の形となつた）。そして、約三〇〇〇万年前の新生代第三紀の中ごろから、相次ぐ火山の噴出で「旧霧島火山帯」が形成された。この時期は、大小さまざまな規模で地盤の上がり下がりがあり、第三紀層の堆積が行われている。



霧島の山々

「霧島火山帯」が生まれた。

霧島火山は多数の小規模な火山から成り立った複合火山で、完全火口一五、火口湖一〇、爆裂口八がある。東南の御池から北の飯盛山まで直径二〇キロメートル、西の烏帽子岳から東の夷守岳が約一二キロメートル、山ろくの周囲は五〇〇キロメートルに達する日本有数の大火山地域を形成しているが、主峰高千穂一五七四メートルと韓国岳一七〇〇・三メートルを結ぶ線は、西北—東南に走って宮崎・鹿児島の県境となり、山腹は東北に下つて宮崎県側にえびの市・小林・都城などの盆地をつくり、西南鹿児島側には牧園高原から鹿児島湾北岸のシラス台地群に続いている。この霧島山系の群峰は、高千穂峯の頂上から考察すると、だいたい北から南東に二〇キロメートルの四大縦列をしているが、この流れに直交する栗野岳—飯盛山と佐賀利山。えびの岳—白鳥山・甑岳、更に大浪池—韓国岳と烏帽子岳—新燃岳—大幡山—丸岡山—夷守山を結ぶ四つの横列があり、この縦列、横列の線上に多くの温泉が湧出している。

霧島火山帯の生い立ちは、相当複雑で諸説があるが、この地区に流入した姶良火山の噴出物（シラスと熔結凝

灰岩）によつて古期と新期に分けることができる。古期のものは更に栗野岳安山岩類、白鳥安山岩類の二活動期に分かれ、いずれも広いすそ野台地の基底にまで及ぶ広大な桶状火山を形成したようである。今日前者は、栗野岳（一〇九四メートル）、後者は白鳥山北方（一三〇〇メートル・蛭野岳（一三〇五メートル）・獅子戸岳（一四二八メートル）などにその一部を残している。この古期の火山活動後、県下一円及び熊本・宮崎方面に分布しているシラス・熔結凝灰岩は姶良・阿多の火山活動が旺盛な時、両カルデラから噴出した大量の軽石流とされ、この噴出物によつて古期の霧島火山は一応覆われたといわれている。現在浅谷・轟木・母ヶ野などの霧島山山ろくを中心として標高四〇〇メートル以下より隼人町・国分市の沿岸一帯に見られる十三塚原・春山原・須川原など及び本町南部の稼原など標高約二五〇メートル内外の高原となつたもので、霧島火山の熔岩類からできている山岳地帯とは地質的に異なる。

新期の火山活動は高千穂を中心とする東部火山群と韓国岳を中心とする西部火山群とがそれぞれの地域に別個に展開した。前者に属するものには高千穂峯・新燃岳・

御鉢などがあり、後者には、韓国岳・大浪池火山などが有る。御鉢や新燃には有史以来の噴火が記録されてい

旧霧島熔岩からできている火山は六觀音池、韓国岳・大浪池、丸岡山・大幡山・夷守岳・二つ石などで、もはや火山活動はみられない。火山の造成は終わり、外界や自然の力によつて破壊されつゝあり、山体も偏平で、大きな火口や爆裂火口を有しているものもあり、ただ噴気孔や温泉に昔の名残をとどめている。新霧島熔岩に属するものは、飯盛山・不動池・瓶岳・硫黄山・白紫池・新燃岳・中岳・御池・高千穂峯・御鉢などで、その形体は円錐形又はつりがね形をし、あまり外界の破壊を受けていない。火口内は急斜しており、熔岩原も原形のままである。時々火山活動をしている。

霧島火山は地方水系に対する分水嶺をなし、大体三方へ水を流している。その一つが、火山の南に源を発し西南流して隼人町日当山、国分平野を流れて鹿児島湾に注ぐ天降川である。

天降川は多数の支流を合わせて流れているが、



丸尾の滝

牧園町北西佐賀利山の北方、東方に源を發している万膳川・三体川及び大浪池のすそから流出している石坂川・小谷川・中津川は激しい浸食を起こし、この地域に変動を与え、複雑な地形をつくっている。中津川は上流において急流をなし、地盤の熔岩をうがち丸尾の滝（安山岩の柱状節理がみられる）をつくり、箇之段で前方が開け平地となる。この支流である小谷川が霧島街道に沿い牧場を流れ、蘿木付近から灰砂層の上を流れ深い谷をつく

り、前者と合流して中津川の平地に水田地帯を形成している。更に犬飼集落を過ぎて犬飼滝となり、これから火山噴出物である熔岩を浸食して深谷をなしている。石坂川及び三体堂田原に段丘をつくっている三体川は宿窪田で合流している。ここに火山灰沖積地をつくり、城ヶ後を過ぎるに及んで峡谷をなしている。また、万膳川は支流鏽河川と成政で合流し、前方の広い火山灰沖積地を流れ、渡瀬を過ぎて金山川に合流する。金山川は横川町山ヶ野金山に源を発して横川・牧園付近でかなりの段丘をつくり、植村で万膳川、塩浸温泉付近で石坂川、妙見で中津川を合流して南流している。上層のシラス層から下層の泥熔岩まで浸食され、険岸が両壁にそそり立ち、清流が岩をかんと流れる景勝地である。この渓谷左岸に新川温泉郷をつくり、国道二三号線が昭和四十二年、新川渓谷経由につけ加えられた。

標高大なる霧島山系から流下する川沿いに平地が形成され、一般に川沿い及び周辺に集落は存在している。この地域は通常高冷地で、標高の高い地域であるが、耕地は大体標高一五〇メートルから六〇〇メートルのところに展開しており、水田は谷間の河川流域に迫田棚田状に

開け、畑は山ろくや丘陵面に段畑、傾斜畑状に広がっている。耕地を切り開くことは自然的に困難で、耕地率は低く一二パーセントにも達していない水準である。

鹿児島県には新生代第三紀中新世以降から現世に至る間に噴出した火山岩類及び火山放出物が分布し、殊に薩摩半島北部及び南端部、霧島地区、鹿児島湾の北西部及び薩南諸島に広く分布している。

霧島火山の噴出順序及び地質は中世層の基盤の上に第三紀中新世～鮮新世の火山岩類がのり、更に霧島の活動前半又はそれ以前に活動した始良・加久藤などのカルデラ噴出物が広く分布している。霧島火山の活動は第四紀（一〇〇万年前～現在）の更新世（洪積世ともい、一〇〇万年前～一万年前）以降で、噴出物は古い方から順に栗野安山岩類・白鳥安山岩類・古期噴出物・現世（沖積世ともい、一万年前～現在）に入つて桜島火山と活動時期がほぼ同じである新期噴出物に四大別されている。つまり、霧島火山は古い時代からの火山岩の重なりから成るわけで、栗野・白鳥安山岩類の正確な地質時代はわかつていない。

鮮新世安山岩として本町では佐賀利山及び三体堂の中

第2章 地勢・地質

野・川床・田方から宇都口・轟木にわたる佐賀利安山岩、手洗・大霧から内の野・浅谷に至る牧園安山岩、烏帽子岳を中心として栗川・市後柄付近までの烏帽子岳安山岩類で大半が輝石安山岩であるが、佐賀利山地方に角閃石安山岩が一部分布している。輝石安山岩の斑晶は斜長石・普通輝石・紫蘇輝石で橄欖石を伴っている。これらはほとんど火山形態を失い、烏帽子岳など一部を除いて丘陵状を呈している。霧島火山群の熔岩は輝石安山岩類を主とし、斑晶・微斑晶有色鉱物として普通輝石・紫蘇輝石のほかに橄欖石がしばしば認められ、角閃石は栗野安山岩類にわずかに見いだされる。また、古期噴出物中に橄欖石玄武岩がわずか含まれる。熔岩は必ずしも塊状のものばかりではなく、破碎されたもの、集塊岩質のものなどもある。

新生代第四紀の更新世以降に生じた始良カルデラは大量の噴出物を降下又は流出させていたが、①降下軽石、②やや熔結した軽石流、③暗灰・灰色の熔結凝灰岩に至る種々の岩相があり、およそ①に相当するものをシラス、③に相当するものを灰石と普通呼んでいた。

シラス（又は灰砂層）は南九州に広く分布し、本県の



霧島山噴火山一覧表

	火 湖 山	海拔m 山頂 湖面	岩 石	特 徴
1	佐賀利山	763	角閃安山岩	円頂丘又は岩脈
2	矢岳	1,132	輝石安山岩	鐘状火山、径 500 m の火口跡山体の 浸食著しい
3	烏帽子岳	988	橄欖石 輝石安山岩	円錐丘、南東に開く火口跡
4	湯の谷岳		安山岩質	南に開く径 1.5 km の火口跡
5	栗野岳	1,094	同 上	西に開く火口跡
6	蝦野岳	1,305	同 上	径 600 m の火口、山ろくにノカイドウ
7	獅子戸岳	1,428	同 上	山体は全く浸食される 西部に白色粘土質
8	飯盛山	846	橄欖石 輝石安山岩	浅い小火口湖、最も新鮮
9	白鳥山	1,313		浅い小火口湖 冬季は凍結する
10	六觀音池	1,300		径 500 m の火口湖
11	甑岳	1,301	橄欖石 輝石安山岩	
12	不動池	1,240		径 210 m の火口湖 pH 2.2 強酸性
13	硫黄山	1,310	凝灰角礫岩	碎屑丘、火山弾多く、硫黄 岩石の粘土化著しい
14	韓国岳	1,700.3	輝石安山岩	ホマーテ、径 900 m の火口 火口壁の比高 170 m
15	爆裂口 (北西)		同 上	径 500 m
	琵琶池	1,330	凝灰角礫岩	韓国岳東北の爆裂火口 径 200 m
16	大浪池火山	1,412	紫蘇輝石安 山岩	ホマーテ

第2章 地勢・地質

	大浪池	1,411.9		径630mの火口湖、火口壁の比高170m、水深116m
17	夷守岳	1,344	橄欖石輝石安山岩	コニーデ、北ろくに熔岩台地頂上の火口は東壁を欠く
18	大幡池	1,230		爆裂火口、径500m、比高20mの丘が池をとりかこむ
19	大幡山	1,352.5	岩滓質の火山碎屑物	二重式火山、径50kmのカルデラ外輪山と径500mの火口をもつ中央火山
20	新燃岳	1,420.8	輝石安山岩その他	ホマーテ、径750mの火口、径150m、深さ30mの火口湖、現在活動中
21	中岳	1,345	同上	二重式火山、外輪山には径700mのカルデラ、中火口丘には径200mの浅い火口
22	御鉢	1,408	同上	径600mの火口、有史以来、しばしば活動、高千穂峯寄生火山、火口の深さ234m
23	高千穂峯	1,574	同上	二重火山、第一次火山の火口を埋めて、第二次の活動があり、頂上に火口なし
24	二つ石	1,300	同上	径500mの火口、山体浸食やや進む
25	小池	420	同上	二つ石火山の熔岩せき止め湖
26	御池	305	同上	径1kmの爆裂火口湖、深さ101mで日本最深の火口湖、湖岸20m以上のかけ

約半分と宮崎県の約二〇パーセントの面積を占め、本町においては標高約四〇〇メートルの中部一帯（浅谷・轟木母ヶ野）から下場に分布している。地形が急峻であるとともに、崩れやすく、地すべりを生じ、畑作において干害を受け、劣悪な土壤として土地利用の点でも問題となる厄介物として取り扱われてきた。これまでシラスとして一括してきた堆積物は、白灰砂質堆積物を総称する地方的俗語であって、火山灰・火山砂・軽石質火山礫の集まりで、これに岩石の名前をつけてみると角礫含有軽石質凝灰岩といっている。組成はガラス質部及び軽石部が大部分を占め、結晶として少量の石英・長石・紫蘇輝石を含み無層理で固結しない。灰石はシラスに比べ軽石・火山灰の熔結度の進んだ灰白～暗灰色の熔結凝灰岩（火山碎屑物が噴出し厚く堆積した時、まだ熱く、長い間高熱状態におかれていると自身の重みで圧縮されて、ついに中心部において熔融が起り、一見熔岩に似た緻

密な岩石となる)で泥熔岩ともいわれ、岩質が硬く建材として採取されている。河川の浸食作用によつて形成された切り立つた断崖一帯に熔結凝灰岩がみられる万膳川

(注) 馬込甌穴群 軟弱な岩盤の川床に安山岩礫などが水力で回旋し岩穴をつくり実に壯觀で現在町文化財に指定。

上流の成政、三体川の鹿ノ屋、石坂川上流の宇都口、下流の間手原・塩浸、中津川上流の健崎・笛ノ段、及び下流の犬廻、金山川の川津原から安樂・妙見・新川渓谷一带にみられる。

始良カルデラ形成に先立つ輕石流は一〇枚あるといわれており、国分付近で四枚(新川・重久・岩戸・入戸)の各輕石流が重なつており、それぞれ熔結部と非熔結部とに分かれている。熔結部は浸食に対し抵抗が強く非熔結部は弱く、したがつて階段状の地形を示し、殊に国分付近では顯著である。この輕石流と輕石流との間に砂礫の水成層が挟まれていることがあり、この水成層は始良層と呼ばれているが、おそらく湖の堆積物と考えられている。国分地区において重久・岩戸両輕石流を間にして上中下の三部に区分され、上部層が安樂及び犬廻滝から下流、妙見地区でみられ約六〇メートルの厚さといわれ、岩相も多様で、ローム質粘土層疊層・砂層・輕石層及びこれらの互層からなつておる。

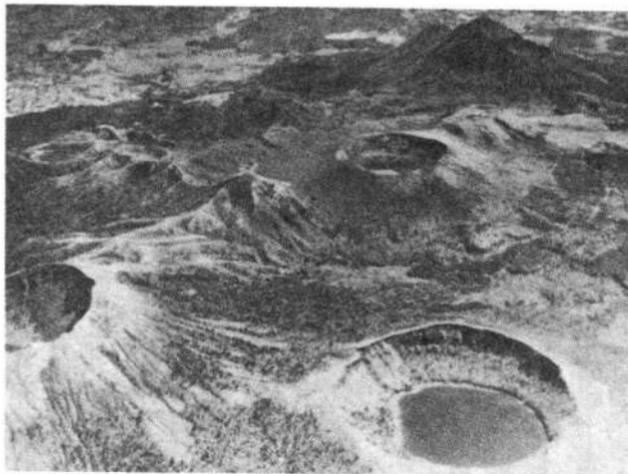
韓國岳『古事記』には、虚國岳と記されているが、この書き方ならば天孫降臨神話の後に記された「むなしの空國」にちなんだ名称と考えられる。本居宣長によれば、「背に肉がないよう、やせた不毛の地を通つて」と解するが、『古事記』によれば、笠沙はこの虚國岳に向かいの地であるとも解せられる。霧島連山中最も高い山で、まんじゅうをもりあげたような形である。単独火山でこれほど膨大な山は、九州ではほかにないという。山頂には直徑九〇〇メートル、深さ三〇〇メートルの鉢状の火口がある。

大浪池独立した火山であるが、古くから湖沼として知られている。直徑一キロメートルを超えて、火口壁は美しい灌木に覆われ、常に韓國の雄姿を映している。美女お浪の伝説(民話の項参照)がある。

白鳥山 えびの高原の北に横たわるよう、広い山頂

をもち、ここから最も手軽に登山できる山である。頂上の展望は非常によい。

この山の火口湖がビヤクシ池で、水深五〇センチメートルから一メートル足らずで水底の草も見える。数多い



霧島山の火口湖

霧島の池のうち最も高い位置にあり、その浅さと相まつて凍りやすいため、冬季スケート場として利用されている。

えびの周辺 韓国岳西北のふもと、一三〇〇メートルの高度に、円錐形の小丘の南側には、多くの硫気孔がありて硫黄山と呼ばれる。もと硫黄の採集が行われたところで、その西北ふもとに不動池がある。直径二一〇メートル、円形の池である。付近に六觀音池があり直径五〇〇メートル・水深一四・二メートル余、火口壁は明るい美しい樹木に囲まれている。その北岸に六觀音の祠ほこらと、霧島東神社の上宮があり、付近に賽の河原と呼ばれる小石原がある。

額（こしき）岳 韓国岳の北方にあり、山頂は平らかな円錐丘。南ふもとの飯野・小林方面に特徴ある姿を見せていく。頂上には五〇〇メートルもある火口があるが、浅いので一面の草に覆われ、火口壁にはミヤマキリシマが多い。

獅子戸岳 西は韓国にうずめられ、南は新燃岳に破壊されて、山相のまづしい小峰で、一帯の灌木に覆われている。

新燃岳 中岳と獅子戸岳の中間、円錐形にそそり立っているが登りやすい。火口湖は直径一五〇メートル、深さ一メートル、美しい硫酸銅色の水をたたえている。近年（昭和三十四年二月十七日）大爆発をして、火口内に三個、火口外壁に四個の新火口ができる。

山頂のミヤマキリシマの大群落、西側斜面の樹木の一部も被害を受け、現在もなお噴煙を上げている。

中岳 新燃岳の東南に連なる台地状の峰で、山頂には、ひょうたん形の火口がある。火口は浅いので、しどね状の草原となり、ミヤマキリシマが美しく、特にツヅジの時期には列をなす登山客でにぎわう。

大幡山 複雑な地形をした二重火山で、南方獅子戸岳に面する外輪壁は築山と呼ばれ、北西は大幡池の外壁となつて境界ははつきりしない。中央の火口丘も平坦で、特徴のある峰は見られない。大幡山の北にある丸岡から眺めた時、この老樹に囲まれた大きな池と、韓国・新燃・中岳・高千穂と続く霧島連峰の大観はすばらしい。

高千穂の峯 霧島火山群の東端にそびえ、中央に光峯、東と西に二つ石・御鉢二つの寄生火山があり、二つとも一三〇〇メートル以下は完全に合体し、均整のとれ

た威容をほこり、古くから靈峰として知られている。

この高千穂の名は、いつごろから起こつたものか明らかでないが、『延喜式』にある「智鋪」にゆかりの名称と思われ、今は国分市重久にその地名をとどめている。日向児湯郡の高千穂についても、阿蘇に近く智鋪郷のあつたことを証としている『日向国史』も同じような考え方をとっている。

山中の湖沼は、おおむね火口湖であり、魚類はあまりすめない。しかし、水に含まれた鉱物質によって特徴のある色彩を發揮している。

古来霧島四十八湖といって、多数の湖沼があつたというが、いずれも山上にたたえられていたため、自然に埋められたもの、流出したものなどが多く、今はその数を減じている。

三 霧島山の名称

霧島山を指し示す名称として、古來、神話・伝説などに書き表されたものはいろいろある。例えば、霧島・高千穂峯・襲峯・穗触峯・久志布流峯、二上峯……等々。

この中では、霧島が最もよく表されている。しかし、今では霧島というは、山群全体に冠せられた名称であり、高千穂というは、その東部の一高峰に限定されている。以下、霧島の名称の由来の諸説について列記してみよう。

『三国名勝図会』の記事によると、「——此の岳、本名ハ高千穂トイエドモ、從來霧島ヲ以テ通称トナス」とあり、『日向風土記』の記事には、次のように記されている。

一、天孫降臨ノ時、霧深クシテ物色ヲ弁ゼズ。稻穂ヲ投散シ給イシニヨツテ、雲晴レシ事、上文ニモ記セシガ如クニテ、此峯ハ特ニ朝夕霧常ニ深キ処ナリ。此處ニ至ツテ然リトス。故ニ霧島ト名ヅクトイエリ。

二、一説ニ皇孫天降ノ時、雲海ヲ見下シ給ウニ島ノ如ク見ユルモノアルヲ、天瓊矛ヲ以ツテカキ探り、其處ニ天降リアリ、其矛ヲ逆矛ニ立テ給ウ。是ヲ天逆矛ト号ス。今ニモ雲霧都城ノ曠野ヨリ高千穂峯ノ山腰ヲ擁スル時ハ、其ノ中ニ一峯頭ワレ出デ漂ウ島ノ如シ。故ニ古ヨリ都城ノ地ヲ雲海ト言イ、又、其ノ地ヲ虚海トモ言ウ。霧島ノ名ハ是ヨリ出タリトス。

三、一説ニ天孫稲穂ヲ撒ジ給イシニ、雲霧開キ晴レショリ霧島ノ名起ルト言エル説アレドモ、霧島ノ名ハ其以前ヨリ名ニテ、瑞穂ノ縁ニシヨリ高千穂峯ノ名ヲ得シニテ、今猶霧島ト言ウ名ニ呼ビ来タルハ却ツテ其旧称ニヤミリタラント言エリ

上文ニ記セル諸説アリトイエドモ、蓋シ、第一説ノ如ク此ノ峯霧深キ縁故ニテ名ヅケタルナラン。島ノ字ハ上古比ノニモ雲霧都城ノ曠野ヨリ高千穂峯ノ山腰ヲ擁スル時ハ、岳ノ下ノ周廻水沢ナリシ故ニ因ツテ名ヲ得タルナルベシ。云々……。

レバ、現ニ朝夕見ル景状ヲ呼ビ習イ、霧島ト唱エ、其ノ呼
称盛ニナリテ世ニ行ワレ、高千穂ノ名ハ次第ニ隠レツルナ
ラン。云々……。

また、『古事記』には、「天ノ八重多那雲ヲ押シ分ケ
テ、イツノチワキニチワキテ、天浮橋ニ浮キジマリ、タ
リタタシテ高千穂峯ニ天降リマシキ」と、高千穂の名が
現れ、『日本書紀』には、「……高千穂峯ニ天降リマス。
既ニシテ皇孫ノ遊行ス状ハ即チ、久志曰二上天浮橋ヨ
リ、浮渚在平處ニ立タシテ」とある。このほか『日本書
紀』には霧島のことが幾通りにも記されているが、中
に、日向襲之高千穂穂日二上峯、とすいぶん長たらしい
名も出ている。日向の襲地方の高千穂と名づけられた霧
山で、二つそびえた峰を持った山といった調子の呼び方
であろう。

高千穂二上峯の呼び名について、『日向風土記』は次
のように記す。

「天津彦火瓈々杵尊、日向ノ高千穂二上峰ニ天降リマシ
シ時、天暗冥クシテ昼夜別カズ。人物道ヲ失イ、物ノ色別カ
チ難カリキ。茲ニ土蜘蛛アリ。名ヲ大鉗、小鉗トイウ。二
人奏シケラク、「皇孫尊、尊キ御手以ツテ、稻千穂ヲ抜キテ、

穂トシテ四方ニ投ゲ散ジ給ワバ、必ズ開明リナム」ト申シ
キ。時ニ大鉗等ガ奏セルガ如ク千穂ノ稻ヲ捲ミテ穂トシテ
投ゲ散ラシ給ワバ、即チ天開明リテ日月照レリ。因ツテ高
千穂二上峯ト曰ウ。

このほかにもいろいろあるようであるが、だいたい上
記と同じようなものであろう。このようにみてくると、
その真偽は別として、霧島は、その名前の上からでも、
古い伝説の上に立っているといえよう。

霧島の七不議の中の一つに、「蒔かずの種」というの
がある。霧島の山中、竹やぶの中などに、自然生の陸稻
が生えることがあるという。これを、まかずの種とい
う。これは、天孫降臨の際、高天原から持ってきた種が
残っていて、山の中で自然に育つたものだと言い伝えら
れている。

四 踊郷時代の「川」

牧園が、踊郷と呼ばれていた時代、今の万膳川・三体
石坂川・中津川をどのように言っていたのであろうか、
「桑原郡地誌備考」の川調帳に、次のように書いてあ

る。

一、有田川

水源こさ田ヨリ落水田ニ流レ、芦谷原ニテ五分、川通エ入。(今)の万膳川は、有田川といわれていた。)

一、踊川

水源すくな田村頭韓國嶽西又霧島西嶽トモ・赤谷南、
峰・竹田南・千本八里・湯池・手洗湯・ホコナキ湯・今平・ウト・萩ノ

峰谷・坂元・三軒堂・小谷川三ツ円フテ流ル里程一里七分合十一

川一線ニ円フ・田原・瀬不明・岩下・踏・城ヶ尾・汐見経テ

凡一里合三里九分流落往還橋下ノ方ニ於テ新川通エ流入ス。

一、上中津川

上中津川村 安楽村

下中津川村 安樂村

大浜ノ池・池平・手洗湯・明翠山・オムラ岳・平原・一筋川 上中津川村通

千本八重・山城・栄ノ湯・小谷・蘿木・一筋川 上中津川村通

山ニ至ル、二里五分流又・以下不明・燒地獄・明翠山・ウツラ・殿湯

栗川湯・小谷川 三ツ吐合上中津川ニ通・坂元屋・模顛ニ至二

里一分皆一川ニ成テ下中津川村・宇都・代・犬飼瀬・三所社・アセチ ヲ落チ

安楽村・萬戸口ニ於テ一里五分四里一分ヲ經テ新川通エ流入ス。

(注) 石坂川と三体川の合流した川を、踊川と呼んでいた。

萬膳村

五 「新川」の名称変更

新川の名称を天降川と改めようとの変更願が県知事あてに当時の牧園町長から提出された。太平洋戦争開戦直前のことである。

河川名変更認可ノ議ニ付申請(県知事へ)

本県下始良郡ノ中央ヲ貫通スル新川ハ、聖峰霧島山ヨリ

発スル幾多大小ノ河川ヲ合流シ、同郡隼人町浜之市ヨリ海

ニ注ギ、大隅国ニ於ケル屈指ノ大河ニシテ、古ハ之ヲ天降川

(アモイガワ)ト称シタルガ、文禄年間藩主島津義久公ガ

隼人町富隈城ヲ築ク際之ヲ改修シ、東国分村小村ニ注グ河

床ヲ、現在ノ浜之市ニ変更サレタルヨリ以来、新川ノ名ガ

一般的トナリタルモノニ有之、「天孫變ノ高千穂ニ天降リ

マシキ」ノ記録ヲ実証スル旧称ガ、消滅ニ帰スルハ甚ダ遺

憾ノ次第ニ有之、且時局下、肇國精神ノ發揚上、古來ノ河

川名ニ復帰スルコトハ、最モ適宜ヲ得タルモノト被存候ニ

付、之ヲ天降川ト改称ノ儀認可被成下度、考証書類トシ

テ別紙三国名勝図会竝薩隅日地理纂考写相添ヘ始良郡各町
村長連署ノ上此段及申請候也

昭和十六年十月 日

(牧園時報八七号)

第三章 気象

霧島山ろく南西に広がるすそ野、山岳、山峠の地形で、標高差が著しく気象状況は一定せず、上場・下場の寒暖差があるが、総体的には冷涼である。したがって、緑茶の生産、冷涼地野菜の栽培に適している。

平均気温は、観測地の農業大学校（高千穂）で一五度であるから、町平均すると一六度と推定される。福岡・鹿児島に比較すると、夏は涼しく鹿児島よりも一、三度低い。冬の最低気温は鹿児島に比べ、六度より五度も低く、肌を刺すような寒風が吹きまくる。

降水量は、平成元年は二六七七ミリメートルとなつてある。下表の気象概況をみると、鹿児島・福岡の平均降水量よりやや高くなっている。この現象は西南風のもたらす湿気と霧島連山の走向とが年間二〇〇〇ミリメートル以上の多雨地帯を形成している

気象概況

(平成元年1~12月=比、鹿児島・福岡)

月	月平均気温(℃)			日最高気温(℃)		日最低気温(℃)		月降水量(mm)		
	牧園	鹿児島	福岡	牧園	鹿児島	牧園	鹿児島	牧園	鹿児島	福岡
1月	8.8	11.1	9.1	18.0	15.4	-3.5	7.0	156	138.0	104.5
2	7.8	11.1	8.7	17.0	15.3	-6.5	6.9	271	223.0	151.0
3	9.0	12.0	10.3	21.0	16.7	-3.0	7.6	138	139.0	126.5
4	14.7	17.3	16.2	23.8	21.6	0	13.0	356	77.0	35.0
5	17.1	19.8	18.4	25.8	23.5	9.0	16.8		234.5	158.0
6	20.0	23.0	21.8	29.0	26.7	10.0	19.7	288	252.5	145.0
7	24.1	27.1	26.3	31.0	30.8	15.0	24.2	689	491.5	85.0
8	24.9	27.8	27.3	30.6	31.6	17.0	24.9	222	118.5	60.0
9	22.9	25.9	24.3	31.0	29.8	13.0	22.6	481	387.0	543.0
10	17.6	19.8	18.3	26.8	25.4	6.5	14.8	26	18.0	25.0
11	13.0	15.0	13.7	24.5	20.0	1.0	10.3	19	36.0	54.0
12	7.8	10.4	9.6	18.0	15.9	-1.5	5.6	31	36.5	57.5
年平均	15.6	18.4	17.0	24.7	22.7	4.8	14.5	年計 2,677	2,151.5	1,544.5

福岡管区気象台（福岡市中央区大濠1丁目2の36号）

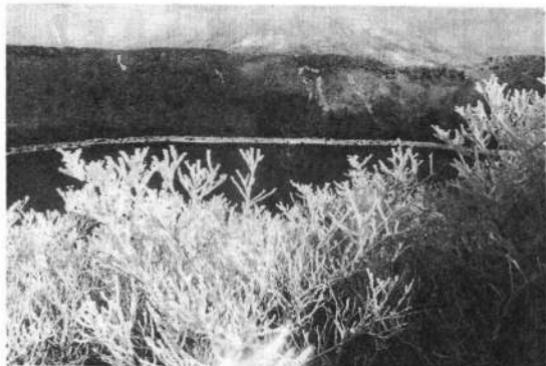
◎鹿児島地方気象台（鹿児島市荒田1丁目24~13号）

○鹿児島農業大学校（牧園町高千穂3311）

} の観測による。

ものと思われる。特に集中豪雨などで三〇〇〇ミリメートル以上三五〇〇ミリメートル以下の年間降雨量を記録した年もあった。

また、台風の通過地帯でもあって、生育生物に対する直接的影響はもちろん、風水害がもたらす土壤浸食、養分流脱などが農業生産を規制している。気象的特徴とし



霧氷

ては更に霧の深いことがあげられる。これは平均気温の低いことと相まって、茶の栽培に好適である。北東部島連山地帯の夏は、上昇気流が激しいため、乱雲や霧の発生が多く、冬は美しい霧氷がみられる。

第四章 台風と霧島山の噴火

一台 風

鹿児島県の特徴として台風の常襲があげられる。県人自らが「台風銀座」と称し、毎年台風による降雨量も多く、その被害は甚大である。昭和二十年から今日まで鹿児島県を襲った主な台風について調べてみた。

・枕崎台風（昭和二十年九月十七日）

十二日にマリアナ諸島付近に発生。十七日午後二時三五分に枕崎付近に上陸。最大瞬間風速六二・七メートル。九州を斜断して伊予灘、広島を襲い、日本海へ抜け、奥羽を横断して太平洋に出た。県内の死者一〇四人、不明二五人。

・デラ台風（昭和二十四年六月二十～二十一日）

十五日ころバラオ北方に発生。二十日午後九時すぎ九州南端に上陸。勢力は上陸後衰えたが、この台風襲来とともに、梅雨と台風の雨が重なって豪雨となる。

最大瞬間風速四三・六メートル。死者七三人、不明二人。

・ジュディス台風（昭和二十四年八月十五日）

十一日バラオ北西洋上で発生。十五日夕方、九州南部をかすめて同夜九時に志布志付近に上陸。最大瞬間風速三九・四メートル。死者四三人、不明四人。

※「三十数名が圧死？」

ガケ崩れで霧島館全壊（南日本新聞）

豪雨による山崩れのため、霧島館が全滅の被害を受けたのもこのジュディス台風であった。

・キジア台風（昭和二十五年九月十三日）

十三日志布志付近に上陸。九州を縦断し日本海へ。最大風速三九メートル。死者三人、不明二人。

・ケイト台風（昭和二十六年七月一日）

九州に接近夜一〇時ころ四国へ上陸。熊毛・大隅地方に大雨。最大風速三〇・二メートル。死者七人、不明一人。

・ルース台風（昭和二十六年十月十四日）

午後七時ころ串木野付近に上陸。九州を斜断。規模が大きかったので九州南部では強い暴風雨に見舞わ

- れ、特に鹿児島・枕崎・串木野では高潮の被害が大きかつた。最大瞬間風速五四・二メートル。死者一二六人、不明八三人。特記される大型台風。
- ・台風五号（昭和二十九年八月十六～十八日）
十八日午前二時ころ川内川河口に上陸。九州を縦断し四国へ。最大瞬間風速四三・五メートル、死者一三人。※新潟に災害発生。死者九人。
 - ・台風七号（昭和三十二年八月十九～二十一日）
九州西方海上を北上。最大瞬間風速四五・九メートル。
 - ・台風十号（昭和三十二年九月五～七日）
六日午後六時大隅半島南端に上陸。最大瞬間風速六五メートル。死者三人、不明五人。
 - ・台風六号（昭和三十四年八月六～八日）
八日朝大隅半島に上陸。日向灘へ。最大瞬間風速四メートル。死者七人。
 - ・第一室戸台風（昭和三十六年九月十四～十六日）
十六日午前九時すぎ室戸岬に上陸。四国・近畿で大あられ。最大瞬間風速五〇・一メートル。死者八人、不明二人。
 - ・台風十三号（昭和三十七年八月二十一～二十二日）
二十一日午後一時すぎに川内と阿久根の間に上陸。最大瞬間風速三三・六メートル。
 - ・台風十四号（昭和三十九年八月十六～二十四日）
二十三日午前枕崎付近に上陸。最大瞬間風速五四・二メートル。死者七人。
 - ・台風二十号（昭和三十九年九月二十三～二十五日）
二十四日午後五時ころ鹿児島湾の入り口から大隅半島南部に上陸。日向灘へ。最大瞬間風速六八・五メートル。死者六人。
 - ・台風十五号（昭和四十年八月四～六日）
六日午前甑島を通り、九州を斜断。最大瞬間風速五四メートル。死者一九人。
 - ・台風十九号（昭和四十六年八月四～六日）
八月四日、気圧九三五ミリバールの大型台風来襲。五日から六日にかけて霧島山系の北部を中心に集中豪雨。山崩れによつて住家倒壊。死者七人（高千穂二人、三体堂四人、万膳一人）の貴い犠牲者を出す。牧園町における被害総額九億三九〇〇万円。
- 金丸知事、自治省、建設大臣、係官、国会調査団な

ど来町して災害実状調査。土木関係＝道路、河川、橋梁など計三億三十六一二万五〇〇〇円。農林業関係＝農業施設一億一四七三万四〇〇〇円。農作物七六六〇万円。教育関係＝二三〇〇万円。家屋＝七〇四〇万円。商工関係＝四七六五万八〇〇〇円。住家全壊三〇。台風十九号により牧園町は未曾有の大災害を受けた。

一 霧島山噴火の歴史

有史以来、記録にみられる霧島山の噴火の歴史をたどつてみると、次のとおりである。

- ・天平十四年（七四二）十一月、大隅国、地震。大隅国二十三日より二十八日至るまで、地大震動す。仍て神命を聴聞せしむ。（『県史』）
- ・延暦七年（七八八）三月四日、地震、噴火、大隅国曾於郡曾乃峯霧島山上に火炎上り、雷鳴を伴う。峯下五、六里沙石積ること二尺。その色黒し。（『県史』）
- ・天慶八年（九四五）僧性空霧島山に登り、法華經を誦して神に祈ること七日を期す。居ること五日にして山震動し、猛火熾んにして暫くも止まるべからず。天暦中
- ・天正四年（一五七六）霧島山神火を発す。天正四年より六年に至りまた炎ゆ。（鹿児藩名勝考）
- ・天正十五年（一五八七）四月十七日、霧島の神火震動

に至りて性空乃ち煙火をさけて、迫門丘の神廟を西北二里許の地に遷す。（裏山考）

・天永三年（一一一）二月一日、霧島山西峰、噴火。霧島山上大に燃え、神社焼けず。（錦杖院縁起）

・永久一年（一一一三）二月三日、霧島山噴火し、社殿焼けず。（『日地』）

・仁安二年（一一六七）霧島山噴火。西生寺殿堂焼崩す。（『県史』）

・寿永二年（一一八三）十二月十七日、大隅国霧島山噴火。（『県史』）

・文暦一年（一二三四）十二月二十八日、霧島山發火、甚だ盛にして、祠宇皆焼尽す。尚日本地理資料には、

（霧島山噴火）、社寺什宝等悉く焼失す。（『県史』）

・大永四年（一五二四）是歲大隅霧島噴火。（地学協会）

・天文二十三年（一五五四）霧島山又火を発す。

・永禄九年（一五六六）九月十九日、霧島山噴火、人多く

焚死す。（『県史』）

・天正二年（一五七四）霧島山神火を発して、天地震動

す。（裏山考）

・天正四年（一五七六）霧島山神火を発す。天正四年より

六年に至りまた炎ゆ。（鹿児藩名勝考）

す。

- ・天正十六年（一五八八）三月十二日、霧島山上神火を發し、申酉の間大地震。
- ・慶長三年（一五九八）より慶長五年（一六〇〇）に至り炎ゆ。（鹿児藩名勝考）
- ・慶長十八年（一六一三）より翌年まで炎。同十九年諸国大地震。（鹿児藩名勝考）
- ・元和元年（一六一五）
- ・元和三年（一六一七）元和三年より翌年に至る。（鹿児藩名勝考）
- ・寛永五年（一六二八）九月二十九日、霧島山噴火し、社寺宝物焼亡す。（日地）
- ・寛永十四年（一六三七）丁丑より翌年に至る。（鹿児藩名勝考）
- ・寛文二年（一六五九）已刻正月より寛文元年（一六六一）十二月に至る。（鹿児藩名勝考）
- ・寛文二年（一六六二）八月より發して寛文四年（一六六四）三月に至る。（鹿児藩名勝考）
- この年九月十九日三時、大隅地大に震ひ海嘯起り、山崩れ地裂く。陸地海となる。（日本震災凶饉改）
- ・延宝五年（一六七七）霧島山神火起。（古年代記）
- ・延宝六年（一六七八）正月九日同神火起。（古年代記）
- ・元禄三年（一六九〇）六月、霧島山噴火、降灰数日に及ぶ。（日本震災凶饉改）
- ・宝永二年（一七〇五）十二月十五日。霧島山噴火、神社塔等悉く焼失す。（日地）
- ・享保元年（一七一六）二月十八日、霧島三山噴出致し百万の雷一度に轟くばかり、黒煙は一千丈許も上り地は震動してやまず、尚噴火の煙に砂混りて降り下りて、白黒おぼろ月夜のごとし、是より火口は両部の池の方に移り、同年三月十六日に至り、両部の池堤は、裂壊し終り、池は一つになり、噴火ますます激しくなりゆきたり。（霧島東神社社記）
- ・享保元年（一七一六）九月二十六日、夜半頃より霧島の西岳震動して、周囲三里半程处处に噴火破裂し、為に其の地内にある所の山林及び神社仏院等は悉く焼失し、其の他災害を被りしもの、外城（外城とは一ヶ郷を云）十二焼失し、この家数六〇〇軒、負傷者三十一人、斃死の牛馬四〇五頭、田畠六二四〇八段六畝十九歩、此の農産高六六一八二石余（官報）、其の後三十四年の間灰下りて恰も春霞の如くなりしと云う。（日本災異誌）

また、「日本震災凶饉改」には、享保元年の噴火について、二月霧島山噴煙を始む。九月霧島山爆発して堂宇、山林等焼失す。十二月霧島山噴火、降灰四日に及び近傍の田畠埋没す。と書いてある。

また、「県史」には、享保一年十二月二十六日、霧島山新燃大に爆発す。田畠損じ人馬死失す。とある。

享保二年（一七一七）一月三日、霧島山噴火、新燃又又大燃有り此以後七日より十一日迄、打続大燃波辺火石にて家屋焼失、錫杖院寺家不残焼の田畠石灰にて降埋、牛馬過分死失、高原、高崎両所役人共迄方方へ引越居候、旧曆二六日より当正月十一日迄度度大燃日向国諸県郡の内諸所損失致す次の通、田畠一三万六千三百〇〇坪余、石砂灰入高三万七九五〇石余、雜穀一五四〇石余、堂社一一宇寺、家三〇軒、寺門前五三軒、社家二六軒、百姓一四軒、死人男一人、けが人三〇人、死牛馬四二〇匹。（厳島福之助編纂鹿児島県噴火書類）八月十五日、霧島山大いに火あり、硫黃地より迸り、大石空に跳り火炎炎々として昼夜絶す。その響迅雷の如し。土灰近國に飛び近郷田を埋むこと數十里、衆恐怖しあるいは以て山神怒るとし、あるいは神火と称す。こうして相次ぐ噴火に、土民恐れおののいたの

で、國主島津吉貴（二十二代）は國中に命じて、怪異説、神火説を禁じ、僧徒がこれに乗じて供物を求めて、祈禱しているのを聞き、これを禁じたので國中大いにこれに服し、怪異説も止んだということが残つてゐる。（西藩野史）

明和八年（一七七一）秋霧島山大噴火、降灰あり、昼にして夜に異らず、数里の田を埋没し、草木焦枯。また「日地」には、霧島山噴火、享保一年より是歳に至り、大に噴火屢熾なり。燒石焰となりて虚空より隕ち、沙石糠を籠う如く灰燼両て昼も夜も異ならず、行人筵席を載て其圧傷を遮り防ぎけり、数里の間田疇を埋没し、草木枯る。と書いてある。

文政四年（一八二一）十二月二十日朝、中岳の絶頂より火を発し……晚方に相成り、黒煙おびただしく炎上り、近辺の地までも震動致し候、云々。（震災予防調査会報告書所載、伊地知茂七氏より今村博士に提供せられし文書）

明治十三年（一八八〇）九月、霧島山御鉢より爆発す。爾後蒸氣硫煙を噴出す。（日地）

明治二十一年（一八八八）一月二十七日、西曾於郡霧島岳鳴動、噴火飛灰四、五里内の村落に降下す。（凶荒

- ・大正三年（一九一四）一月八日、午前二時二十分頃爆發す。宮崎にて戸、障子震動す。北諸県郡西嶽村に栗の実大の石を降らし、姶良郡東裏山村には降灰あり、人畜に対し被害なし。
- ・昭和三十四年（一九五九）二月十七日、新燃岳爆發、大噴煙を吹き上げ、新燃のミヤマキリシマ全滅の危機にひんす。
- ・明治二十二年（一八八九）十二月十日、霧島岳噴火、轟激雷の如く、黒煙忽ち天に漲り、火石は硫黄灰に燃え移り、延焼熾なり。（凶荒誌）
- ・十八日午後〇時半頃より爆發愈々猛烈となり、降灰地上に二、三分爾後激変なし。
- ・明治二十四年（一八九一）六月十九日、霧島山爆發。降灰のため草木の葉を凋枯す。（日地）
- ・明治二十八年（一八九五）十月十六日、霧島山爆發、噴火時刻午後〇時二六分一六秒、家屋一二軒焼失す。四人慘死す。（鹿児島県災異誌）
- ・明治二十九年（一八九六）三月十五日、霧島山爆發、フランス海軍士官一名負傷す。案内者一名死す。
- ・明治三十一年（一八九八）十二月二十六日、霧島山爆発、宮崎・松山・高知等にて爆音を聞き降灰あり。
- ・明治三十三年（一九〇〇）二月十六日、霧島山爆發、五名の死傷者あり。（鹿児島県災異誌）
- ・明治三十六年（一九〇五）十一月二十五日、噴火。
- ・大正二年（一九一三）十一月八日、霧島火山は、本日八日午後十一時三十分頃、突然大鳴動を起し、火焰高く天に昇り、引続き降灰ありたりと云う。

昔のものは、はつきりしないが、享保の噴火は新燃岳であり、明和の噴火は御鉢と推定される。文政の噴火中岳とあるのは、新燃岳のことであろうと推定、その後、明治・大正の噴火は御鉢が中心になつて活動し、最近は新燃岳が活動している。

これほどたびたび噴火しているのであるから、昔からこの山中で命を失つたり、家財や田畠を失つた人の数も随分多かつたであろうことが想像される。信頼の程はわからないが、永禄の噴火では、庄内の一尚宗信者三〇〇人が、霧島参りの際突如として噴火、ことごとく焼け死

んだという記録が見えていると伝えられるし、享保の噴火の時も、神参りのため御鉢のふもとまで来て泊まつていた福山の一人が、遭難したという記録も残つている。という『鹿児島県災異誌』(県発行・測候所発行)、山川鉄三郎・三木英太郎共著『マウント霧島』参考)。

霧島山噴火の記録をみると、その中の大きな噴火、爆発は、牧園から仰ぎ見られる新燃を中心として、古代の天平十四年(七四二)以来たびたび繰り返されているようである。特に、享保の大爆発による地震と降灰、明和の降灰、明治時代の大爆発と、その都度の降灰など、われわれの祖先は、この霧島山ろくに農業を営み、作物を栽培し、子供を育てながら、噴火や地震などのような開いを繰り返し、生きてきたのであろうか、昔は火山の観測もなく、地震の予報も出されず、いつ起るか知れない爆発や地震に、恐れおののきながら、火の山霧島を、東に眺めていたであろう姿が想像される。この火の山、霧島といかに聞く、調和を保ちながら生活してきたか、その生活の歴史はわからない。

新燃は、昭和三十四年噴火してから、大きな爆発はないが、今はただ噴煙を上げている。

以後平成二年現在までは、大きな災害を引き起こすような噴火及び台風は本町では起きていない。

第五章 人口・世帯

第5章 人口・世帯

牧園町の人口は、昭和五十五年の一万一五一六人を基準とすれば、上昇したり減少したりであるが、対六十年が二・二九パーセント減。平成二年になると七・五パーセントも減少していることになる。これは、第一次産業の停滞による流出が主であり、第三次産業（主として観光）の発展による高千穂地区の人口増が抑制作用として働いてはいるものの、現状維持がむずかしく、本町は若者流出による人口減は食い止められないでいる。

今後考えなくてはならないことは、いかにして若者を定着させるか、これこそが大問題になつていて。

老齢（六五歳以上）人口も、平均寿命の延びにより、今後ますます進む。ちなみに、昭和五十五年の国調から六十年までの経過みると、年平均二パーセント近くの伸び率を示しているのである。

牧園町人口の推移

年度 項目	昭和55年国調	60年国調	平成2年
人口55年国調との対比	人 11,516 % 100.0	人 11,195 % 97.21	人 10,652 % 92.49

世帯数の推移

年度 項目	昭和55年国調	60年国調	平成2年
世帯数55年国調との対比	4,174 % 100.0	4,164 % 99.7	4,185 % 100.2

一世帯当たり家族数の推移

年度 項目	昭和55年国調	60年国調	平成2年
一世帯平均家族数55年国調との対比	人 2.76 % 100.0	人 2.7 % 97.8	人 2.5 % 90.5

一方、
男女別人口構成比率及び人口密度、
世帯数など
については別表のとおりである。

牧園町の人口のあゆみ

年次	世帯数	男	女	総人口	一世帯平均
昭和56	4,219	5,226	6,259	11,485	2.7
57	4,284	5,250	6,298	11,548	2.7
58	4,308	5,168	6,218	11,386	2.6
59	4,311	5,156	6,180	11,336	2.6
60	4,164	5,132	6,063	11,195	2.7
61	4,170	5,110	5,975	11,085	2.7
62	4,161	5,054	5,963	11,017	2.6
63	4,178	5,016	5,863	10,879	2.6
平成元	4,190	4,958	5,865	10,823	2.6
2	4,185	4,889	5,763	10,652	2.5

(町住民課資料による。平成2年7月1日現在)

校区別人口対比

校区別	総計	男	女	世帯数
牧園	3,011	1,420	1,591	1,093
中津川	1,578	753	825	586
高千穂	3,457	1,573	1,884	1,554
三体	744	377	367	236
万膳	1,091	523	568	382
持松	810	384	426	291
合計	10,691	5,030	5,661	4,142

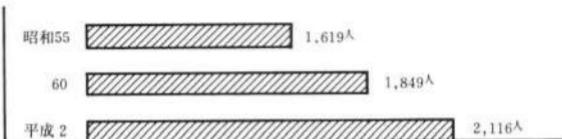
(住民基本台帳資料、平成2年7月1日現在)

第5章 人口・世帯

老齢人口の推移

年齢	昭和55年国調			60年国調			平成2年7月1日現在		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
65~69	247	330	577	251	364	615	283	420	703
70~74	180	231	411	219	295	514	229	333	562
75~79	134	172	306	126	199	325	173	256	429
80~84	77	132	209	100	125	225	82	150	232
85~89	28	66	94	41	87	128	42	88	130
90~94	6	12	18	11	27	38	15	34	49
95~99	—	4	4	1	2	3	1	10	11
100以上					1	1			
合 計	672	737	1,619	749	1,100	1,849	825	1,291	2,116

(住民基本台帳資料)



人口動態

区分 年次	自然動態(A)			社会動態(B)			増減 (A)+(B)	自然動態人口 (出生死亡)
	生出	死亡	増減	転入	転出	増減		
昭和56	137	114	23	835	925	△ 90	△ 67	本町の自然動態人口は、出生が死亡を
57	172	114	58	1,042	1,042	△ 20	38	平均して上回り、過去一〇か年の平均
58	141	125	16	784	1,002	△ 224	△ 208	
59	110	101	9	816	944	△ 128	△ 119	
60	130	131	△ 1	772	924	△ 152	△ 153	
61	106	124	△ 18	635	688	△ 53	△ 71	
62	128	108	20	684	701	△ 17	3	
63	97	117	△ 20	694	777	△ 83	△ 103	
平成元年	95	109	△ 14	695	816	△ 121	△ 135	

(注) △は減

自然動態（増）率は平均〇・四五パーセントである。出生率が上り、平均寿命の延びによる死亡率の減が、自然動態増加率を上げることになり、これが人口増加の基本である。したがって、老齢化も進むが、若年層の定着をはかり、出生率増加をはかることが最大の課題である。

社会動態人口 (転入転出)

社会動態人口は、依然として転出が多い、本町の特性として観光産業に異動が激しくみられ、昭和五十六年以降も転入が減少している。これは、経済社会事情によるものと思われる。過去一〇年間の社会動態減少率は年平均約二パーセントになっている。

人口減少が及ぼす社会的影響

本町の人口推移をみると、隣接町村に比べ、比較的ゆるやかであるとはいって、確実に減少している。人口流出の原因は多々あるが、最大の要因は経済事情の変化であり、農林業の低経済性と地場就業機会の少ないことである。若年層の流出による老齢人口の増加、労働力の劣悪化は町の活力をなくしてきた。

高度経済発展の運動原則として過疎と集中過密化を生

じ、いろいろな弊害を引き起こし、農村は常に産業経済予備地域としての役割を果たし、生産、生活機能、教育、保健、防災など基礎的行政条件の低下を招き、本町としても行政水準の維持向上に苦慮しながら努力してきたところである。著しい過疎地域に対しても、「過疎地域対策特別措置法」が適用されてきたが、牧園町は、準過疎地として当時その恩恵に浴せなかつた、いわば過疎・過密の谷間として、住民の理解と協力により行政推進に当たってきたが、従来の国三全総（第三次全国総合開発計画）にみる生活、生産、機能の調和した定住構想に基づく住みよい町をつくるために積極的に国・県の施策を受け入れ、若年層の定着できる環境整備を図らなければならぬ。

幸いに、人口流出も安定化の方向で横ばい傾向をみせるようになり、やや活力を取り戻しつつあるが、今後対処しなければならない問題として、高齢社会下における老人問題、福祉年金、老人医療に関する国民健康保険への対応、農林業の兼業老齢婦人化に伴う生産力低下への懸念、商業活動の低迷がある。また、消防防災においては、組織の高齢化による消防力の維持、児童生徒の減少

のもたらす社会的影響は、計り知れないものがある。地場産業の振興を促進し、働く場の確保と生活環境を整備し、文化、教育、医療、福祉の充実を図り、より豊かで自然と生活、機能を調和させた、活力のある町づくりのため、人の交流と定住する施策を積極的に講じなければならなくなっていくことであろう。

第六章 地名

一 字 名

牧園町内の大字は、藩政時代の村名であつて、明治二十二年（一八八九）町村制施行以来大字名となつている。その数は大字七、小字は九八一である。

◎大字 宿窪田（小字数一四八）

川影・川影前畑・ウケノロ・芦谷原・芦谷原前田・芦谷原田神・芦谷原川原・堂ノ山・登明田・後方・芦谷原上・七俣平・登明迫・大道迫・大道中迫・柿木迫・鶴ヶ野・上原・田原・田原山・後迫・瀬戸口・杏ヶ迫・浜ノ場・大迫・大迫平・市塚・七俣・北脇山・西瓜越・毛森・芝良・平之山・川津原・貫ノロ・小瀬戸・棚ヶ迫・松ヶ迫・八窪・芋洗・時仏・宿ノ迫・宿窪田・牧園・鳥越・南迫・別当山・網掛・別当・枝ヶ迫・瀬戸・桜ヶ迫・戸草瀬戸・桜ヶ迫尻・真米・猿越・外川原・稻荷迫・柄柄・建添・湯ノ段・湯ノ迫・入佐ヶ迫・藤ヶ中尾・大胡麻ヶ

迫・胡麻ヶ迫・轟平・上ノ迫・遠目塚・間手ヶ迫・間手ヶ原・岩下・城ヶ後・下牧・前田・三畝元・岩崎・登別・雀ヶ原・ヒガン田・雀ヶ原山・坂元・赤田・椿・大丸・城ヶ鬼・奈良木田・樺木・向荒・星ヶ迫・岩崎迫・牧神岡・石坂山・池田・真角・島田・鬼沢津・花立・石坂松ヶ迫・瀬ヶ迫・尾上迫・馬場口・横瀬踏切・須ノ迫・弓張木・小段・沓日方・井丸迫・金差段・門ノ木・唐笠松・桑鶴・桑鶴平・都ヶ原・行司知行・市来迫・鍋倉・孫八・川原後迫・川原前迫・札建・柿ヶ迫・滝ヶ迫・藤ヶ山・湯ノ窪・塩浸・湯ノ上・戸崎・平落・寅ヶ迫・宮ヶ迫・芝峯・手ヶ迫・コラ谷迫・コラ谷・枚山・別府・針ノ崎・湯ノ原・丸羽・原・越附・須淹・新湯・砂子・安楽・梅ヶ渡・葉切

◎大字 三体堂（小字数一四〇）

音川田・長田・下原・大丸・奈良木・岩崎・牛角・川原崎・桑木前・小丸・岩下・小床・宇都口・鍋山・谷ヶ迫・札立・山ツケ・尾谷口・上小原・包ヶ迫・楠木迫・立山・平黒川・七十走リ・桜ヶ迫・篠丸・大蘭・鬼ヶ窪・井手ヶ原・妙見原・渡瀬口・聞迫・登り迫・宮ヶ迫・音川前・中川原・外蘭・堂ヶ平・中福良・上原・棚ヶ迫・後迫・

松迫・萩ノ段・渋迫・下大迫・中ノ迫・下中迫・瀬ヶ迫・
 芦谷迫・桑木迫・下芦谷迫・度山迫・櫛山・櫛山上・後
 山・竈係・柿梁・赤池・集リ・引坂ヶ迫・引坂迫平・外
 松・似ヶ迫・御用ヶ迫・人枯木・上大迫・小回迫・回迫・
 離山・且野場・チシャケ迫・藤ヶ迫・藤段・丸山・風呂
 谷・牧原・上牧原・赤子渡・上赤子渡・古屋敷・赤子・
 湯原頭・湯ノ原・池ノ谷・寺野・中原・倉掛・梅木山・
 提段・多々羅迫・岩山・別府田・原・前原・中野・今別
 府・宮田・桑木ヶ谷・松木坂・上松木坂・新五屋敷・内
 野々・鉢投・手洗・関平・高野・一本松・豆打原平・豆
 打原・堂地・神田・川床・松ヶ渡・持山・佐木段・枇杷
 ノ首・下ノ段・手崎谷平・宇瀬戸・四角目・四角目平・
 川床平・蘭田・菅牟田・黒巣・新兵衛塚・田方・似尾・
 大平・西原・岩瀬戸・中岡・石ヶ迫・蓑荷谷・荒平・池
 元・道ヶ迫・古江山

◎大字 万膳（小字数二〇三）

谷・北園・無物田・仮屋下・前田・中福良・新改・成政・
 越ヶ尾・九日田・下府鳥・西原・貫川・巡礼塚・銷河・
 若ノ上・立平・木場田・中肥・井の手平・瀬戸・黒丸向・
 木場迫・余慶松・石塚・湯助・永野・小比良・五敷・黒
 丸・黒園・下黒丸・佐賀利山・牛木屋・大良ヶ谷・丸尾・
 木屋谷・鹿倉・伊丹ヶ生・貴之多尾・銀湯・善王神・中
 之生・高塚・中之段・椎祭志・狸穴・後世宇都良・鳥足・
 小鉢・板小屋・海老野・出功平・音無・奥之院・入ヶ中
 尾・觀音街道・湧水・惣須木院・阿歷利鹿倉・宇津鴻城・
 千迫・稻之段・内野々・元隆寺山・立山・坂の下・昌蒲
 ケ谷・茂市街道・美黄木ヶ瀬戸・上水堀迫・伊勢堀・格
 木山・水堀迫・湯の迫・石の水・黒園下・大窪・山下・
 浜之湯・前平・穂出坂・上十石・岩屋平・皿北・滝の上・
 一本格・巣ノ谷・斗星田・宮園原・平松・月の輪・竜ヶ
 嶺・下十石・中尾・中段・三ヶ元・宇都迫・堪忍迫・並
 松・珍多良・入迫・毛毬迫・古屋志・椿へ・水上・丸山・
 弓射場ヶ谷・木佐ヶ迫・先権場・樅の場・供養塚・道ヶ
 迫・浅谷・黒須・黒葛山・梁瀬塚・扇の迫・金木山・谷
 の口・向山・梅の木・渕之・川舟・今村原・前之迫・大
 ケ谷・萩の平・中岡・横射場・俵ヶ迫・七曲・永山・湯
 迫・轟・上小笠・竹原・登迫・木登迫・馬渡・下扇迫・

下彦水・処迫・源太・下村松・村松・彦水・荒平・中岡
 大岩下・茗荷谷ノ上・茗荷谷・赤池・水頭・栗野山・鶴
 飼ノ口・有村・城ヶ段・武反田・城ヶ宇都・梅ヶ渡迫・
 落水田・車田・松崎・鍋迫・梅ヶ渡・緩目・妙見迫・桜
 ケ迫・論ヶ迫・猫迫・花立・有村上・高尾・大迫・井手
 上・井手ノ山・緩子・南迫・乙迫・女田・滝ヶ迫・滝ヶ
 迫窪山・渡瀬

◎大字 下中津川（小字数一一九）

妙見崎・岩下・和氣ノ湯・滝下・滝ノ上・犬飼迫・幸藏
 野・打越・北住・斜迫・打越手・亀松迫・エボシダケ・
 小山・平迫・傘松・坂下・梨窪・脇迫・赤迫・勤原・犬
 飼・田代・後迫・化鶴・今後迫・本迫・小後迫・今後原・
 草木迫・下馬塚・ビンヅル・ビンヅル尻・中迫・小中迫・
 水溜・知鳥迫・水留原・桃ヶ八重・タラキ迫・真角原・
 雷ヶ原・尾迫原・下原・桑木迫・上タラ木・早馬迫・改
 田口・上野原・萬徳・四ノ坪・三月田・八反丸・下川原・
 向田・向田原・鍋迫・荒田・南谷・坂水・橋口・門田・
 花草・小山口・大久保・ウフコエ・他ヶ迫・牛ヶ迫・細
 迫・先細迫・右牧・先右牧・浸坂・大口ノ谷・藤ヶ瀬戸・
 伊藤松・大堂・焼山下・焼山・榎迫・間ノ瀬谷・火峯原・

タラガ迫・松ヶ迫・折橋後迫・東迫・桜谷・折橋・ナコ
 チ・瀬戸山・中瀬戸山・木登迫・下木登迫・西ノ原甲・
 坂上・古道・別府・觀音迫下・曲リ白尻・廻迫・八毛・
 星合原・越ヶ野原・論ヶ迫・大内迫尻・地頭原・東平・
 深谷滝平・笛ヶ迫・深谷・食田・大内迫・大人形・桜迫・
 船窪・稼原・戸井迫・迫田・水流

◎大字 上中津川（小字数七九）

萬徳前田・越の一・越の二・上前田一・久保前・前原・
 馬場・宮ノ前・油田・川路山・井手原・梨子木・上向田・
 桑取迫・脇の迫・柳迫・橋の口・榎の迫・穂年・横迫・
 船ヶ迫・谷迫・千羅ヶ谷・谷頭・平早・中紙段・大目迫・
 迫の口・椅迫・七回・大久保・桜迫・宮の上・板小屋・
 道下・少原・池田・湯窪・鉢山・靈通山・扇の原・小
 松迫・宇都・後迫・湯迫・溝口・真角迫・出口・中迫・
 真角原・松木平・鬼ヶ瀬戸頭・馬場口・鬼ヶ瀬戸・福迫・
 棚迫・通ヶ迫・千石迫・下原・健崎・健崎前・古江・宇
 都迫・上段・下段・包迫・池頭・井田水・一本木・塩水・
 開戸口・石峯・大久保原・谷門・川原・神小窪・川路・
 添ヶ迫

◎大字 高千穂（小字数三〇）

手原前・平原・蘿木・蘿木山・須ヶ田・柳ヶ平・小谷・
出口・高岡・荒平・内久保・母ヶ野・岩下・山口・真頭・
小塚原・八長・三本木・大瀬戸・栗川・竜石・殿湯・手
洗・江藤谷・山城・丸尾・湯ノ谷・硫黄谷・栄之尾・新
床鹿倉

◎大字 持松（小字数二六二）

前田・天水堂面・内恒見・竹下・下り・出泉迫・尾迫・
小原迫・小原山・皆越・向田方・向田方平・向田・黒ヶ
原・黒ヶ迫・下池・広池迫・広池・炭床・炭床山・床頭・
淀迫・臼崎前田・総谷・滝ノ上・前春・滝ヶ原・折口・
上床・下床・岩頭・岩原・折迫・滝下・童ヶ原・柿木迫・
古臼崎・距切・後迫・瀬戸上・臼崎宇戸・天水臼崎・仏
前・猿喰・シホラ・山鳥田・ハナクルス・真方・間口・
柳ヶ迫・上竹・深谷・松山・稼原・小松原・榎原・五反
田平・總知尻・別府迫・勝尾岡・平原・平原前・狩田・
宍戸山・鳥越・向ヶ迫・向ヶ平・宇戸原・宇島越・宇戸
原頭・中岡・百木迫・百木追平・宮内迫・茶屋原・茶屋
段・俵迫・田原迫頭・中ノ迫・中ノ迫尻・榎木迫・榎平・
道ヶ迫・権定・亀甲・権溜・仁太迫・西之谷頭・西ノ谷・
次米田・次米田頭・田方・田方頭・聖原・聖原頭・中道

迫・中迫原・五右エ門原・上道迫・扇迫頭・扇迫原・善
五原・扇迫・狩松迫・井手丸頭・井手丸・高尾瓦・高尾・
高尾頭・井手迫・曲山尾・曲山・小井手ヶ谷・砂走・和
志迫・扇迫枝・馬場原・馬場迫・勝間ヶ迫頭・勝ヶ迫・
馬場迫尻・桑鶴・上穴・焼山・笛段前田・四郎ヶ迫・四
郎ヶ山・頭迫・川久保・下溝・ナメラ・深迫前・ナメラ
原・ナメラ前・川久保頭・川久保平・真川久保・佐敷原・
佐敷段・佐敷迫・佐敷平・松ヶ峯・松北・松北頭・柿迫・
湯黒ヶ谷・柿烟・赤ハゲ・赤ハゲ頭・天辰迫・天辰頭・
登立・段床・犬ノ迫・犬ノ迫平・犬ノ迫尻・深迫・音森・
乙森上・小路岡・小路原・岡・岡原・星ヶ迫・甲辺原・岡
山・所平・所迫・桑木頭・桑木烟・拜摩坊・植村前・植
村・下村・後谷山・後谷・猿内・猿内頭・内訛山・内
合・水洗・小渡・大渡・大渡下・大渡口・ヌキノロ・大
渡上・大渡平・大渡裏・八丁山・出水原・中原・下原・
中山・黒岩・向中春・市後原・市後柄・市後柄山・小渡
川・小谷川・今水・今川・今水平・今水原・辻之原・次
八堀・大迫原・堺子仏・堺子原・大合迫・伊勢谷山・森
伏・崩渡頭・崩渡・白酒田頭・池迫・池迫原・弓張水・
芝立・芝立原・白酒田・白酒田尻・伊勢谷平・伊勢谷・

新五屋敷・赤水・冷水谷・冷水原・冷水平・冷水岡・冷水段・イチノ木山・藤尾・阿三ノ迫・拾石平・拾石原・拾石迫・草子原・草子谷・草子段・回リ山平・小丸・鮫迫・鮫迫頭・田口迫・阿三迫尻・葛谷・間世・間世頭・白田・坪子田・卯先ヶ宇都・山神原・棚迫・中小路・三又・仮屋田

二集落名

区名	集落名	世帯数
牧園第一区	前塩浸、後塩浸、下塩浸、日之出、	三〇
同 第二区	発電所	四四
同 第三区	川原、城山、間手原	八二
第四区	牧園、城ヶ後	一六二
ノ下、窪田、中宿窪田、上宿窪田、堂 麓、ひばりが丘(一)、ひばり		

「牧園町自治公民館設置規則」によると、牧園（一〇区）、三体（四区）、万膳（五区）、高千穂（八区）、中津川（八区）、持松（四区）の各集落名と世帯数は一覧表のとおりである。

高千穂第一区	同	第五区	浅谷、水堀(A)、水堀(B)
第二区	同	第六区	林田、硫黃谷付近 主として丸尾付近
第三区	同	第七区	国道二二三号線・小谷川・殿湯川で 囲まれた北側部分
第四区	同	第五区	国道二二三号線・町道母が野線・高 千穂小字町グラウンド教員住宅前・高 道道路(雇用促進住宅横の道路で囲ま れた部分)
第五区	同	第六区	町道母が野線と旭が丘住宅を含む殿 湯川で囲まれた部分
第六区	同	第七区	地図上で小谷川より北側
第七区	同	第八区	小谷川・国道二二三号線・町道母が 野線で囲まれた部分
第八区	中津川第一区	母が野・栗川地区(旧一区)	町道母が野が野線と旭が丘住宅を含む殿 湯川で囲まれた部分
第九区	下安楽、上安楽	妙見、折橋	湯川で囲まれた部分
第十区	代下大飼、中大飼、上大飼、新川、田 道下荒田、上荒田、戸ノ道、深谷、古 道溝口、下越、上越、上荒瀬、中荒瀬、 下荒瀬	下大飼、中大飼、上大飼、新川、田 道下荒田、上荒田、戸ノ道、深谷、古 道溝口、下越、上越、上荒瀬、中荒瀬、 下荒瀬	地図上で小谷川より北側
第十一区	元通山前、通山後、上湯之元、下湯之 西横瀬、上鶴、下鶴、健崎下、健崎上	元通山前、通山後、上湯之元、下湯之 西横瀬、上湯窪、下湯窪、上馬場、	小屋、下板小屋、中板小屋、上板
第十二区	八九	八〇	一〇四
第十三区	六五	五六	一一三
第十四区	七七	七六	一二〇
第十五区	五九	五九	一九五
第十六区	六四	六四	一九五
第十七区	九二	九二	一〇四
第十八区	一九五	一九五	一七四
第十九区	一九五	一九五	一四一
第二十区	一九五	一九五	六一
第二十一区	一九五	一九五	四八

〔参考〕 地名あれこれ

(注) 高千穂校区は四区から八区に再編成(昭和五十六年度)
から

持松第一区	下馬場、下板小屋、中板小屋、上板
第二区	臼崎中、真方中、臼崎下、真方下、臼崎上、
第三区	持松西、持松東、持松中、持松北
第四区	下笠段、中笠段、上笠西、上笠南、
第五区	川久保、高原原、崩渡、伊勢谷
第六区	東下村、下村、上村、西市後柄、大
第七区	渡、中春、黒岩
第八区	六三

「参考」 地名あれこれ
どこにも思わず首をかしげたくなるような地名がある
ものだが、町内では、次の地名について考察しておく。
踊の麓 昭和のはじめまでよく使われていて、「踊郷」
の府本(屋形)のあるところという意味である。踊はも
と北原氏の所領であったころの城の名前であったが、島
津氏の所領となつたころ、税所氏の所領であった持松を
合わせ、近世のはじめに百二外城の一つとして、一つの
行政区画となつたのが踊郷で、その中心として地頭の屋
形であるところが麓と呼ばれた。麓の郷士たちの調練の

場所が馬場又は飯屋ん馬場であった。城は山にあり、そのふもとという意味である。

三体堂（さんでど）三体堂は明治二十二年牧園村が生まれるまでは、桑原郡踊郷三体堂村と呼ばれていた。三体堂という名の由来については、①飯富神社に、倉稻魂命・天照大神・天児屋根命の三体の神が祭つてあったので三体堂という説と、②三体堂には觀音堂（飯富神社の鳥居前方）・釈迦堂（中福良）・さんかく堂（中郡）の三つの堂があつたので三体堂という説とがある。

古文書の中から出でてくる三体堂の「体」の字が、躰・台・手・臺・代とさまざまに使われているのもおもしろい。

躰……台明寺文書・応保二年（一一六二）の記に「三躰峯」「三躰堂田」とあり、東郷源七郎知行目録・元和六年（一六二〇）の記にも「三躰堂村」とある。また、「桑原郡地誌備考」川調帳の記も「三躰堂」となっている。

台……「地誌備考」の中では、「三台堂村、下三台堂

村の二村に分つ」と書いてある。

手……元和六年の高帳には「三手堂」とある。

臺……慶長十九年（一六一四）の高帳には「三臺堂」

と書いてある。

代……薩藩沿革地図・天正十四年（一五八六）の記には「三代堂」とある。

安樂（あんらく）この地名は、この地を訪れたある行者が、神の言葉で「この地に温泉出すべし、安樂に居住を得べし」のお告げがあったことになつてゐるが、溝辺を領していいた肝付氏と何らかの縁があるのであるまいか。曾於郡にも安樂があるから。

妙見（みょうけん）伊邪那岐神社は、もと妙見神社と呼ばれ妙見崎にあつたから呼ばれた名といわれる。明治初の神社調には、折橋にその名がみえ、古道・深谷にも同名の社がある。この辺りは税所の一族瀬戸口氏にちなんで瀬戸山の地名も残つてゐる。オシタテ山があり、トネリコが栽培されていたともい。ホッセベイは星合原とい、いわれありげの地名である。この辺りは麓地方に魚塩の送られる交通の要路に当たり、岩堂觀音に似た阿弥陀石像が安樂にも発見された。

犬飼（いぬかい）和氣公とのゆかりを説く説もあるが、特に犬と関係なく、土俗がインケと呼んでいたのであろう。犬飼滝に松が茂つていたからであろうか、坂本龍馬は「蔭見

の滝」と記して土俗の言葉を巧みに写していく面白い。

横瀬 小字にこの名がない。どこか横流する川の辺りの名が一般化したものであろう。板小屋などもその例か。

霧島の温泉場の硫黄谷、ミョウバンは、泉質による地名であったが、のち専ら栄之尾と書かれた温泉を、白尾国柱は可愛峠と記しているから、その地形が呼称のもとであろう。

牧場 林田バスの停留所に今なお「牧場」がある。これは、製材所とともに国立の施設ができた明治のころからの呼称である。

寺原 林田バス停に「寺原」がある。以前は平原と書いた。平坦な台地を「デラ」と呼ぶから、これも地形からつけられたものようである。

明治になつても踊郷の名称は二〇年も使われた。牧園町の名は牧園小学校から取られたという。牧園は馬場の近隣の名称である。